２．ナショナリズムとグローバリゼーション

－アイルランドのスポーツを例に－

坂　なつこ

《はじめに》

GAA（Gaelic Athletic Association、以下 GAA）が、アイルランドの「ナショナル」なシンボルであることを示している理由は、それが象徴的な意味で「政治的」であることだろう[1)]。GAA は、設立の当初から、IRB（Irish Republican Brotherhood）との強いコネクションにもかかわらず、特定の政治団体を支持したことはないし、政治的活動を促進したこともない。だが、その政治性は疑い得ない。例えば、最近でも、2006 年 8 月、1981 年のハンガーストライキ 25 周年集会にベルファストの GAA スタジアム（Casement Park）が使用された[2)]。民主統一党（UDP）の G. キャンベル議員は、「GAA が IRA と関係しているという認識を振り払おうと努力しても、このような行為はその認識を強めるものだ」と、グラウンドの使用を批判している。1970 年代には英国軍による占拠という経験を持つこのグラウンドを使用しての記念集会は、ユニオニストに対する強い印象を与えるものであることは明白だろう。

しかしながら、この「事件」は、GAA 本部とアントリウム支部との間に集会に対する姿勢に温度差があることも示した。GAA 本部は、この事件を、GAA の「規定」に反して政治的な目的でグラウンドを使用したとしてシンフェィン党とアントリウム（カウンティ）支部を批判し、9 月のオールアイルランド大会決勝へのシンフェイン党議員へのチケット優先販売を差し止めた[3)]。ハンガーストライキ記念集会の主催者は公式的にはシンフェィン党ではなく、支部としてはシンフェィン党に対して使用許可を出したのではないともいえる。しかしながら、記念スピーチが、シンフェィン党の G. アダムス党首によって行われており、他の党員やハンガーストライキによる犠牲者の家族も大きな役割を果たしていた。新聞では支部においても議論が分かれていたと見ているが、しかしながら、この「事件」が、アントリウムが北アイルランドの一部であるという地域的、政治的特質を如実にあらわしているといえる。

GAA 本部のこのような反応は、彼らが特定の政治団体とは関わらないという従来の「規定」を繰り返すものである。しかしながら、UDP による批判を受けるまでもなく、GAA はその設立の当初から、アイルランド島の統一を追求し、英国の文化支配から脱するという目的を掲げてきたのであり、そこではナショナリストの政治的取り組みとは容易に重なり合うのである。

だが、他方で、GAA 本部による反応はまた、スポーツとしてのゲーリックゲームスという側面を強調するものになっているとも思われる。「英国スポーツ」への抵抗から生まれ、「アイルランド島におけるカソリック教会に次ぐ巨大団体」（クローニン）であるアマチュアスポーツ組織 GAA であるが、近年では、グローバル・メディア・スポーツとなったサッカーやラグビーとの、「再度」の競合関係にある。そのなかで、GAA は「伝統的」であるというだけではその存在の維持が困難になってきているという側面がある。

ここには、GAA が喧伝してきた「ナショナルなもの」のゆらぎを見ることができるのではないだろうか。急激な社会経済の変化を経験しているアイルランドにおいて、ゲーリックゲームスのさまざまな場面においても、「古いアイルランド」と「新しいアイルランド」の葛藤がみられるともいえるだろう。しかし、他方で、「ナショナルな」文化の象徴としての GAA があらわしてきたのは、はたして単一なナショナルアイデンティティだったのか。

本稿では、「古いアイルランド」の象徴とされてきた GAA が、どのようにナショナルアイデン

ティティを担ってきたか、またグローバリゼーションと「新しいアイルランド」の進展を背景に、どのような変化を被りつつあるのかについて考察する。

《GAA》

GAA は、1884 年に、M. キューザック（Cusack：1847-1906）の呼びかけにより、アイルランドの「伝統的なゲームや娯楽」を守るための全国的な組織として設立された [4)]。しかし、それは単なる文化復古主義ではなく、19 世紀のアイルランド独立運動を背景に、生活習慣の英国化への反発の表明であり、英帝国支配への抵抗であったといえる。大沼は、キューザックの力点が、英国スポーツに対峙する意味でのアイリッシュ・スポーツの振興にあったとし、そのため「アイリッシュ・スポーツという主張自体、自他の区別意識を明示し、GAA の設立とゲーリック・スポーツの誕生が、直ちにアイルランド内における、英国スポーツと対抗することになった」としている [5)]。このような文化のイギリス化への抵抗は、スポーツの場面にだけ生じたものではなく、アイルランド史においては文学や言語の復興運動としてのゲーリックリバイバル運動がよく知られている [6)]。だが、GAA の特色は、大沼の次のような叙述に見ることができる。「GAA の社会的基盤は農村部の農民や職工であった。ダブリンに暮らす裕福なプロテスタントを中心としたスポーツという当時のアイルランドのスポーツ事情に照らしていうならば、それは、地理的にも職業的にも宗教的にも周縁化されていた人々ということができる。GAA は、これらの人々をゲーリック・スポーツの復活・保護・育成を通じて組織化していった」[7)]。文学や言語運動を担っていったのがアングロアイリッシュや知識人層であったのと対照的に、ゲーリックゲームスでは、周縁化された人々を吸収し、階級横断的な普及により、大衆的基盤を獲得することができたといえるだろう。

他方で、GAA は、アイルランド各地に伝統的に行われていた地域のゲームやルールを GAA ルールに統一することで、その組織を確立していった [8)]。そこには、キューザックの反英国を掲げながらも英国スポーツにおけるアスレティズムに傾倒し、近代スポーツの要素を取り入れていく過程を見ることができる [9)]。だが、そのような近代的な志向は、GAA を特徴づけるものの一つといえる「Ban（禁止条項）」についてみてみるときに、影を潜める。特に 1971 年まで続いた「英国スポーツ」（サッカー、ラグビーなど）の禁止、また 2001 年に廃止された、北アイルランド保安部隊、英国軍隊で勤務した経験のあるものについてゲーリックゲームスの参加禁止（ルール 21）は、GAA がいかに強く 19 世紀の反英的ナショナリズムを理念として保持してきたかを捉えることができる。

「Ban（禁止条項）」の歴史的変遷について、石井は、禁止条項の意味づけが GAA において当初から政治的で一貫していたわけではないことを示している。反英国ナショナリズムの昂揚だけではなく、GAA の国内における他スポーツ組織との競合関係も指摘されている [10)]。だが、例えば IAAI［アイルランドアマチュア陸上競技協会］との権力闘争に基づいたものでも、GAA が「アイルランド的なるもの」を独自に差異化させようとしていたことは指摘されうる [11)]。

この点に関して、厳しい批判は M. クローニン（Cronin）によってなされている。クローニンは、「古いアイルランド」と「新しいアイルランド」の対比において、GAA が、「ルール 21」や「ルール 42」（「英国スポーツ」による GAA グラウンドの利用禁止）を保持しているために、「植民地の言語を保持し続けるだろう」とする [12)]。

クローニンは、ポストコロニアルの過程を、ネーションへむかう道筋として、植民地化→復活→ナショナリズム→開放・自由化→ネーションとして、この過程に依拠して、GAA が「いまだに F. ファノンの旅に捕らえられていて、開放とネーションの間のどこかにいる」とするのである [13)]。

《「古いアイルランド」と GAA》

あくまでも GAA は統一アイルランドの擁護者

であった。そのような態度は、現在の北アイルランドとの関係では排他性を伴うものとなる。クローニンは、このような GAA の 19 世紀後半の「植民地的目的」が、20 世紀になっても貫かれていることを指摘する。そして、「一つのアイルランドの伝統文化」を追求し続けたこと、それの「避難場所」（根拠）となりつづけたことが、アイルランド島の分離を促し続けたとするのである[14)]。

1970 年代に噴出する北アイルランドにおける暴力やテロリズムは、アイルランドにおける英国支配の歴史が依然強く意味を持つことを伝えている。ここにおいて、GAA はどのような役割を担ってきたのだろうか。クローニンは、多くの生活の諸相が破壊され、他の伝統の暴力的な擁護者との接触の潜在的な脅威に巻き込まれてきた北アイルランドにおいて、GAA は、カソリック住民の安全な避難所としてみなされてきたとする。ここでは、マイノリティのカソリックやナショナリストの住民が、一つのアイリッシュ・アイデンティティの包括性と追求のために、他の伝統を排除することを選んできたのである。そのアイデンティティとは、非常に完璧に GAA のスポーツや文化によってカプセル化されるものである。そのような分離こそが、GAA の公式的政策によって強要され、支えられてきたのであり、GAA の本質は、常に、分離した生来のアイルランド文化を保護し、「32 カウンティのアイルランド」を統一するという仕事をするためのアイルランド人の権利擁護への参与を含んできたのである、とするのである[15)]。

GAA の立場は、毎年刊行される「オフィシャルガイドブック」に示されている[16)]。そこには、まず、活動の基礎的な目標（Basic Aim）が宣言されている。「本アソシエーションは、全国組織であり、その基本的な目的はゲーリックゲームスや娯楽の保護と促進を通して、32 カウンティにおいてナショナルアイデンティティの強化を図るものである」[17)]。さらに、付帯的な目標として（Additional Aims）、そこにおいて育成と保護の対象となるのは、スポーツだけではなく、伝統的アイリッシュダンス、音楽、歌、それ以外のアイルランド文化の諸側面、さらにコミュニティ精神やナショナルな意識の活性化を、それらのクラブを通して育成することとするのである[18)]。

重要なのは、『ガイドブック』において「非政党／非宗派支持（Non-Party/Non-Sectarian）」を掲げている点である。つまり、どの特定の政党も、特定の宗派も GAA は関与しないという宣言である[19)]。だが、指摘するまでもなく、基本的目標として「32 カウンティ」を基礎とするという宣言は、「統一アイルランド」の追求を意味しており、そのためカソリック・アイルランドの支持、さらには反英国という意味での反プロテスタントを明言するということでもある。このような政策の追求が、クローニンによって「ユニオニストのオレンジオーダーによる毎年の示威的パレードと同様に、GAA もまた同じシンボリズムを持っている」とされる[20)]。1998 年、聖金曜日合意を経て、GAA はルール 21 の継続について議論したが、非公開の投票によって多くの賛成を得てそれを保留することにした。このことはメディア、政治家らから強い批判を浴びるものとなった。GAA は、「新しい平和なアイルランドにおける後ろ向きな社会ののけ者」のままだったのである[21)]。

このようなクローニンの見解に対して、A. ベアナー（Bairner）は、ナショナルアイデンティティの多層性を強調する。ベアナーは、「未完成の仕事という問題が、GAA という国内最大のスポーツ組織内部と同様に政治的ナショナリストの意見においても重くのしかかり続ける間は、ナショナルアイデンティティの根本的な変容について語ることは困難である」とする[22)]。ベアナーは、アイルランドにおけるポストコロニアルの問題は、地理的近接性、ヨーロッパ内における植民地という特質が、他の植民地とは異なる議論の複雑さをもたらしているとする。とりわけ、歴史的にエリート層が同じ社交界を形成しており、その影響が強く及ぼされたスポーツの場面には、その複雑性、アイルランドのナショナルアイデンティティの多層性が、顕著に表れるといえる。

《スポーツにおけるナショナルアイデンティティ》

サッカーでは、北アイルランドチームと共和国チームが、ラグビーでは統一チームが編成されることは、この国のナショナルアイデンティティに異なる意味を与えているといえる。

GAA だけではなく、スポーツがアイルランドにおいて放つスペクトラムの他方には、北アイルランドのサッカーチームが表象する「筋金入り hard-line」のプロテスタント・ユニオニズムがある[23]。カソリックの参加はほとんどなく、観客はカソリックのプレイヤーが彼らのチームに選出されるのを嫌悪している。特に伝統的なカソリックのクラブ、とりわけグラスゴー・セルティック（スコットランドリーグ所属）のようなクラブでプレイしていた場合は非常に強い嫌悪感を示すといわれる[24]。だが、共和国のサッカーチームが、もっとも成功したのは 1988 年のヨーロッパ選手権、1990、94 年のワールドカップであった。これらは、アイルランド系とはまったく縁がないイングランド人によってマネジメントされたチームであり、選手のほとんどがイギリス生まれのアイルランド人であった[25]。ここでチームやそれへのサポートが示しているアイデンティティを、L. アリソン（Allison）は「コスモポリタン、都会、モダン、軽薄、そしてイングランドやアメリカのポップカルチャーへの強い親和性であり、イングランドのエスタブリッシュへのそれではない。サポーターは、強くアイリッシュディアスポラに一体感を持っており、カソリックの田舎のアイルランドへではない」とする[26]。アリソンは、1995 年には離婚をめぐる国民投票のキャンペーンについて言及し、そこでは「古い」アイルランドと「新しい」アイルランドへの深い分断への議論があったこととする[27]。そこにおいて、「GAA が『古い』アイルランドをイメージするものであるとすると、サッカーチームは、『新しい』アイルランドのイメージと強く結びついている」とするのである。そこには、1992／93 年のシーズンから開始されたイングランドのプレミアリーグの影響をみることができるだろう。サッカーは「英国軍隊のスポーツ garrison sport」としてより、むしろメディアを通して伝えられるグローバルスポーツとして受容されていくといえる[28]。

対してラグビーは、統一チームを編成しており、異なるアイデンティティを表現する。アリソンによれば、サッカーの宗派性とは対照的に、アイルランドのラグビーは、比較的超然としており、「西のイギリス人」のサポーターは、アイルランドの政治が暴力にコミットすることをアナクロニズムでむしろ恥ずかしいことだと思っている。それは、ラグビーが、中産階級に支持されることからきている。彼らは、上流階級が行うスポーツと考えられるゴルフやフィッシングも同様に行う傾向にある。ラグビーの他には、クリケット、ホッケーが、統一チームを持っており、それらのスポーツは、主としてトリニティ（ダブリン）などのカレッジで行われていたために、プロテスタントかカソリック中流階級に好まれたスポーツであるといえる。そこには、宗派的違いよりもむしろ、階級的違いが反映しているといえる。アリソンは、国境を越えた接触をよしとしている彼らにとって、政治的、宗教的理由により他者を排他的に扱うことはないとする[29]。だが、その連携は「中産階級内部での水平的な結合であり、階級を縦断する形の垂直的統合が図られるわけではない。また北アイルランドでは、階級関係が宗教的差異と連動するため、学校システムを通じてラグビーが中産階級によって占められるという状況が再生産される」のである[30]。

ラグビー協会が南北統一であるのは、その階級性ゆえに、当初から政治的な中立性を保持していたからといわれている[31]。しかし、そのラグビーが、ナショナリズムと対峙したのが、ワールドカップ開催の時であった。ベアナーは、アイルランドにおけるそれぞれのスポーツが抱えている状況がそれぞれのアンセムに象徴されていると論じたが、ラグビーにおいてナショナルアイデンティティの問題が表面化したのもアンセムであった。GAA では、試合を行う際に共和国国旗が掲げられ、共和国国家「Amhrán na bhFiann（Soldier's

Song）」が演奏される。それが共和国側で行われるときと、アルスターの北アイルランドで行われるときの直接的、象徴的意味は、全く異なるものであることは容易に想像しうる[32)]。

1995 年のラグビーワールドカップ南アフリカ大会に際して採用されたラグビーアンセム「Ireland's Call」は、英語で書かれ、歌詞にはアイルランドの 4 つの地方（すなわち全アイルランド島を示す）の名前が盛り込まれたものとなった。これは「Amhrán na bhFiann（Soldier's Song）」が、アイルランド語で書かれ、英国の植民地支配への抵抗を歌っていることから、北アイルランドから選出されたプレイヤーや、その背後の北アイルランド社会を配慮して新たに採用されたものであった[33)]。当時の北アイルランド問題を背景に、「統一平和」の象徴ともとらえられたラグビーチームであったが、「国際大会」においては、分裂を抱えた社会の矛盾が露出する場となったといえる。

《ナショナルアイデンティティの形成》

文化ナショナリズムについての議論で、吉野は、「ネーションとナショナル・アイデンティティの創造を目指す『創造型』」と、「すでにネーションとして確立している状態でナショナル・アイデンティティの維持、促進、強化を志向する『再構築型』」を理念型として提示した[34)]。福岡は、吉野のこの理念型を用いアイルランド語を巡る状況を文化ナショナリズムの変容の過程で捉えているが、ここで、福岡は、M. ビリク（Billig, 1995）が、高揚しているナショナリズムとは別に、確立された民族を再生し続ける日常的な習慣となった「凡庸なナショナリズム Banal nationalism」と呼んだことに着目している[35)]。そして、吉野の「創造型」から「再構築型」の過程、あるいは「熱い」ナショナリズムから「凡庸な」ナショナリズムへの移行を、単なるナショナリズムの衰退あるいは形骸化として捉えるべきではないとする。なぜなら、「両者の間には、一つの民族であることを要請し、奨励するものとして確かに連続性が見られる」からである[36)]。福岡は、ビリクを引用し、その過程を次のように説明する。「国民国家が主権を持った独立国として確立し、内部からの挑戦にほとんど直面していないのであれば、かつては意識的に表示されたであろう、民族の諸シンボルは、視界から消えはしないが、代わりに確立した母国の環境に吸収していくことが予想される。これが、シンボルに対する意識の高さから意識の薄さへの変化である」[37)]。そのようなシンボル化されたナショナリズムは、旗や装束、音楽、そしてスポーツや儀式など、文化の諸形態において日常生活に紛れ込み、ルーティン化していくのである。

ポピュラーカルチャー研究において、スポーツと「熱い」ナショナリズムの関係は、吉見が述べるように「あまりにも自明」なものであったかもしれない[38)]。しかし、福岡が示すように、文化ナショナリズムはむしろ日常生活において、ナショナルなものの創造と再生を繰り返し、ルーティン化していく過程、すなわち「自明になり、ありふれたもの（凡庸）になっていく」過程に着目する必要がある。T. イーデンサー（Edensor）は、従来の文化ナショナリズム論においては、例えば、B. アンダーソン（Anderson）はその洞察においてアイデンティティ化の現代的な形式を取り扱わなかったし、また、GAA についても論じている J. ハッチンソン（Hutchinson）は、文化ナショナリズムを純粋な制度的運動と理解したとしている[39)]。それに対し近年のナショナリズム研究において、注目されているのは、ナショナルアイデンティティの分析がポピュラーカルチャーや日常生活に位置づけられる研究であるとした[40)]。そこにおいてビリクが指摘した日常生活へのナショナリズムのルーティン化は、重要な指摘であるとする。

だが、GAA というナショナリズムの象徴が、「ルーティン化」するのは、共和国においてであって、北アイルランド地域ではないといえる。「国民国家が主権を持った独立国として確立」するのは南の共和国であるが、そこには英国に従属されたままの北部アイルランドが存在するために、主権国家でありながら常に「内部からの挑戦」にさらされ続けているといえる。そのため、北ではむしろ、

GAA は「熱いナショナリズム」を表象し続けている。福岡は、アイルランド語に見られる文化ナショナリズムの変容の過程において、「創造型」から「再構築型」への非連続性を考察した。だが、アイルランドのナショナリズムのプロセスは、スポーツの諸相においては、常に「創造型」と「再構築型」のナショナリズムが相互に関連し、葛藤しているということができるのではないだろうか。

ベアナーは、アイルランドにおいて「ポストコロニアル」を論じることは危険をはらんでいるとする。それは、すでに述べたように、地理的近接性とともに、アイルランド社会に根づく「Britishness」や「Englishness」を区別することが、他の植民諸国と比しても困難であるということが挙げられる。そして現在でも北アイルランドの存在のゆえに、クローニンが論じるように南のアイルランドが「新しいアイルランド」を確立しているとしても、「コロニアルとポストコロニアル」の時代の区切りをつけることは、やはり困難を伴うといえるのである[41)]。

《「新しいアイルランド」と GAA》

ルール 21 が廃止されるのは、聖金曜日合意から 3 年を経て、ようやく 2001 年になってからであった。そして、さらに、4 年後の 2005 年には、ルール 42 が、一時的という限定付きながら、2007 年に解除され、クロークパークでラグビーの 6 ネイションズが行われることが決定した[42)]。

すでに GAA の専用グラウンドであるクロークパークは、2003 年のスペシャルオリンピックの会場になったり、有名歌手（アイルランド人に限らない）のコンサート会場となったりしている。また、近年、さまざまなイベントや展覧会の開催、ホテルの併設など、周辺の土地開発も含め、いっそうビジネスパーク化が進行しつつある。GAA が FAI（アイルランドサッカー協会：共和国）や IRFU（アイルランドラグビーユニオン）に対して、どれほどの貸与料を請求するかという点も、関心を呼んでいる。そのような意味で、クローニンが指摘した「古いアイルランド」を象徴的に担ってきたゲーリックゲームスのグラウンドや、GAA は、1990 年代以降、大きく変化してきたといえる[43)]。

GAA がアイルランドの伝統文化の「担い手」を追求している姿勢は、GAA が「GAA アイルランド語用語辞典」がつくられていることからも読み取られる。これは、引退が近いプレジデントの S. Kelly はコメントに寄せて、アイルランド語を GAA のゲームにおいてだけではなく、広く学びたい、ビジネスに生かしたいという声を受けて作成したとしている[44)]。だが、このことをもって、GAA が単に「古いアイルランド」を象徴するだけであると読み取るのは、文化ナショナリズムの特質を考えた場合、狭すぎる見方であろう。ここには、近年、広がるアイルランド語への関心の普及を含めた新しいナショナリズムの興隆の一端を読み取ることも可能であろう[45)]。あるいは、このような試みは、他方では、近年増加しつつある、外国人移民へのガイドブックともなりうるかもしれない。2006 年 FIFA ワールドカップドイツ大会における、移民社会と受け入れ社会とのナショナリズムの諸相の変化と同様に、1990 年代の「ケルティック・タイガー」の時代を経て、アイルランド社会では、新しい問題としての「流入移民」問題が顕在化しつつある[46)]。

吉見は、「結局のところ、ありふれた多文化状況がグローバルに経験されている今日、トランスナショナルなメディア文化の中でのイメージの大衆消費は、国ごとの境界線を再確認するマルチナショナリズムを強化する方向にも、現実のハイブリッドな状況の中でのバランス感覚を育む方向にも作用するのである」とする[47)]。

「ありふれた多文化状況」に突入しつつあるアイルランド社会において、その社会の変化とともに、「伝統文化」を「ナショナルアイデンティティの維持」機能として提示してきた GAA は、今後どのような変化を迫られるか。それを読み解くためには、GAA を単純なアイルランドナショナリズムの担い手として捉えるだけでは足りないだろう。ベアナーが指摘したように、GAA が表象して

きたのは、多層的で構築的なナショナルアイデンティティでもあったといえるからである。

文化ナショナリズムを捉える場合、「いずれも、トランスナショナルなアイデンティティやエスニシティの構築とその分析がいかにナショナルと同質の排他的な枠組みの中で行われがちであるかに注意を促したうえで、そこには収まりきらない『ハイブリッド』な生きざまと実践、トランスナショナルなつながり、そしてマルチカルチュラルな状況が日常において生成している状況を、ナショナルを越えた認識論的枠組みから捉え直し、またそれを通じてそうした枠組みを構築していく必要性」を追求していくことが重要であろう[48)]。そこにこそ、日常生活においてルーティン化されていくさまざまなナショナルなアイデンティティの葛藤を捉える契機が潜んでいるのではないかと思われる。現在、グローバリゼーションによって新たな社会変容を経験しつつあるアイルランドにおいて、ナショナルなものがどのように形成されていくのかは今後の課題となる。

【注】

1）Gaelic Athletic Association は、ゲール体育協会、あるいはゲール運動競技協会と訳されることもある。

2）The Irish Times, インターネット版 2006 年 8 月 14 日。1981 年、ボビー・サンズをはじめ、10 名が北アイルランドの英国統治を批判し、ハンガーストライキによって死亡した。

3）*The Irish Times*, 2006 年 9 月 1 日。GAA は、議員の出身カウンティが決勝に出場する場合には、慣習的にチケットの優先販売を行ってきた。同紙によれば、政治的イベントによる GAA の利用に対するそのような措置は過去にも行われている。また、党員がローカルの GAA クラブを介した通常の販売によってチケットを入手することは禁止してはいないが、同紙は、決勝のチケットは人気のあるプレミアチケットだけに、入手は困難だろうとしている。

4）拙稿「スポーツナショナリズムーアイルランドにおけるスポーツ」『越境するスポーツ』高津勝・尾崎正峰編著、創文企画、2005 年、125 頁。

5）大沼義彦「アイルランドにおけるスポーツの背景ーエスニシティとナショナル・アイデンティティの間」『北海道大学大学院教育学研究科紀要、第 89 号、2003 年 3 月、90 頁。

6）拙稿、前掲書、134 頁。

7）大沼、前掲書、93 頁。

8）大沼、同上書、92 頁。

9）拙稿、前掲書。

10）石井昌幸「黎明期のゲール運動競技協会に関する覚え書き」『スポーツ史研究』第 9 号、1996 年。

11）だが、他方で、このような Ban が、地方レベルでは、それほど厳格だったわけではなかったともいわれる。尊敬される GAA 選手をラグビーやサッカーの試合会場で見つけたときに、人々が意図的に「無視」するということがあったであろうことは想像できる。海老島も、GAA 本部と地方の GAA が比較的自律的関係にあったことに言及している。海老島均「GAA クラブ史を通してみた民族アイデンティティの形成過程」『エール:アイルランド研究』第 24 号、2004 年。また、海老島均「スポーツ組織活動参与とナショナリズムの生成過程—イギリス統治下のアイルランドを例に」『スポーツ社会学研究』第 12 巻（2004 年）。

12）M. Cronin, Ignoring Postcolonialism: The Gaelic Athletic Association and the Language of Colony, *Jouvert*, North Carolina State University, College of Humanities and Social Sciences, Volume 4, Issue 1 (Fall) 1999. ここではインターネット版を使用した。そのため引用箇所は、ページ数ではなく section 番号を付した。

13）C. Graham /R. Kirkland(eds), *Ireland and cultural theory: the mechanics of authenticity*, Basingstoke: Macmillan, 1999.「植民地化された世界は、二つにたちきられた世界だ。その分割戦、国境は、兵営と駐在所によって示される。植民地において、原住民の承認を得られる制度的対話者、コロンと抑圧体制との代弁者は、憲兵ないしは兵隊である」（フランツ・ファノン『地に呪われたる者』みすず書房、1998 年、24－25 頁）本橋は上記箇所を引用して、ファノンの徹底した二元論に言及している。本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波新書、2005 年、92 頁。また、サイードは、ファノンとアイルランド作家 W. B. イェイツの民族主義を対比的に論じている。S. ディーン／T. イーグルトン／F. ジェイムスン／E. W. サイード『民族主義・植民地主義と文学』法政大学出版局、1996 年。

14）Cronin, section 26.

15）Cronin, ibid.

16）GAA, *Official guide*, 2006.

17）GAA, ibid., p.4.

18）その他、女子のハーリングであるカモギー、フットボールのサポート、また国内産業のサポートも表明している。GAA, ibid., p.4.

19）GAA, op.cit. p.5.

20）Cronin, op.cit., sec.38.

21）Cronin, ibid., sec.39。Bairner によれば、 この採決は、シンフェィン党の議員（当時）B. McElduff が次のように語ったことが強く影響していたとみている。「ルール 21 の廃止を議論するものは、警備上の討論における論点を見過ごしている。私は、ナショナリストが RUC に対して信頼感を持つ日が来るとは思えない。北 6 カウンティに英国軍が駐留する限り、そこにはルール（21）の廃止に対する反対が存在するだろう」A. Bairner, Sport, Nationality and Postcolonialism in Ireland, *Sport and postcolonialism*, J. Bale/Cronin, M. (eds), Berg, 2003, pp.164-165.

22）Bairner, ibid., p.159.

23）Allison, Sport and Nationalism, *Handbook of Sports Studies*, J. Coakley/E. Dunning(eds), Sage, p.348.また、A. Bairner, Inclusive Soccer-Exclusive Politics? Sports Policy in Northern Ireland and the Good Friday Agreement,

Sociology of Sport Journal, 2004, 21.

24）サッカーにおけるカソリックとプロテスタントの抗争は、現在でも頻繁に生じている。スコットランドリーグでどちらもグラスゴーに本拠地をもつ、カソリック系が多く支持するセルティクスと、プロテスタント系とされるレンジャーズの対立は有名であろう。また、2006 年 3 月には、カソリックの少年が、プロテスタントの少年たちに暴行され死亡するという事件が起きた。The Irish Times は、一面に少年の棺がセルティックのジャージーを着た友人たちによって運ばれていく、印象的な写真を掲載した。2006 年 5 月 18 日。

25）当時の監督 Jack Charlton（在 1986-1995）は、後にアイルランド名誉市民を授与されている。また Maurice Setters は、Charlton のアシスタントコーチであり彼もイングランド人であった。

26）Allison, op. cit., p.348.

27）1995 年 11 月。賛成 818,842 票／反対 809,728 票の僅差で離婚が認められた。ちなみに、2002 年 3 月に行なわれた人工妊娠中絶についての国民投票は、賛成 618,485 票／反対 629,041 票で否決された。

28）Sky Sports は当初から英国と同様アイルランドにおいても放送を行っている。近年とりあげられる国内リーグ（eircom League）の観客減では、イングランドのプレミアリーグの影響が指摘されている。2005 年のシーズンでは、カップ戦を含めたテレビ視聴率や観客数は増加しているが、リーグ自体の観客動員数は最も多いものは 8 千人足らずであった。RTÉ、インターネット版、2005 年 12 月 10 日。FAI は、2006 年以降 3 カ年で実施されるリーグ改革案を提示した。
FAI：http://www.fai.ie/merger/ （2006 年 5 月 26 日）

29）大沼、前掲書、96 頁。

30）大沼、同上箇所。このことは、海老島も言及している。海老島、前掲書。

31）大沼、前掲書、96 頁。

32）Wikipedia, Ireland national rugby union team の項を参照。
http://en.wikipedia.org/wiki/Ireland_rugby#Controversy_over_flags_and_anthems)

33）Jason Tuck, Rugby Union and national identity politics, *Sport and The Irish Histories, Identities, Issues*, A. Bairner (ed.), p.113.また、プロテスタント系選手の場合、学校でアイルランド語を習うことはないために、アイルランド語の歌詞は歌えないという背景もあった。

34）吉野作造『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会、1997 年、53 頁以下。

35）福岡千珠「『アイルランド語』に見る文化ナショナリズムの変容」『ソシオロジ』50 巻（3）2006 年、57 頁。

36）福岡、同上書、57 頁。

37）Billig, 1995, 41. 福岡の訳による。

38）吉見俊哉『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社、1999 年、41 頁。

39）T. Edensor, *National Identity, Popular Culture and Everyday Life*, Berg, 2002, p.11.

40）Edensor, ibid., p.11.

41）Bairner, ibid., p.172. また、尹慧瑛「北アイルランドのユニオニズムと『包囲の心理』」『エール』日本アイルランド協会学術研究部、2000 年 12 月、第 20 号も参照。

42）ハンガーストライキによる犠牲者が収容されていた Maze 刑務所跡地に、現在複合スポーツ施設を建設する計画が持ち上がった。英国の財源によって建設されるスタジアムでは、サッカー、ラグビーとゲーリックゲームスを行えるグラウンドと屋内施設がつくられるとされ、GAA の対応が話題となったが、後に受け入れを表明した。*The Guardian*, May 31, 2006 インターネット版。だが、2006 年の Lansdowne Road(Dublin)および Thomond Park(Limerick)の改修にあたっては、ラグビーユニオンのレンスターおよびマンスターチームのホームゲームは、GAA グラウンドが使用できないため、イングランドかウェールズで行われる見通し。*Tribune*, インターネット版、2006 年 9 月 10 日。

43）ローカルのコミュニティ形成における意味と生涯学習的なスポーツとしての国家プログラムへの参与については、拙稿参照。また、ゲーリックゲームスの選手協会（Gaelic Players Association）との関係についても、拙稿、前掲書参照。

44）*GAA Irish Terms Book*, 2006.

45）アイルランド政府は、アイルランド文化の観光事業における利用も活性化させている。ヘリティッジとナショナリズムの関係について、吉野、前掲書、71 頁。
アイルランド政府の関連ホームページ：
http://www.arts-sport-tourism.gov.ie/
http://www.failteireland.ie/

46）M. Holmes, *Ireland and the European Union*, Manchester University Press, 2005. アイルランドが抱える内なるマイノリティである「トラベラーズ」についても、近年、エスニシティ問題として扱われつつある。J. O'Connell, Travellers in Ireland: An examination on discrimination and racism, *Racism and Anti-Racism in Ireland*, R. Lentin/R. McVeigh, Beyond the Pale Publication, 2002.

47）T-M. スズキ、吉見俊哉「編者序文　グローバリゼーションの文化政治」、『グローバリゼーションの文化政治』平凡社、2004 年、26 頁。

48）岩渕功一「スペクタクル化される『ナショナル』の饗宴－メディアにおける『普通の外国人』の商品化」『グローバリゼーションの文化政治』平凡社、2004 年、352 頁。